

# 忘れられたシルクロードの痕跡

## — 閩南語と日本語の繋がり —

商 鍾嵐\*

### はじめに

私が大学で日本語の勉強を始めたとき、よく知り合いに「君は、閩南出身だから、日本語の勉強は簡単でいいね」とよく言われた。そのとき、なぜ閩南出身者にとって日本語は勉強しやすいものかはさっぱりわからなかったし、閩南語を日本語と繋がらせるのも不思議なことで考えこんでしまった記憶がある。

さて、その後、日本語を勉強し続け、日本語教師になった今、ふと、その話題を思い出した。10数年間日本語を勉強し続けている間にも、「あ、確かに、閩南語は発音、声調において日本語と似ているな」と、なんとなく思ったことはよくあった。語彙の面でも、「あ、この言葉の言い方、閩南語では日本語と同じ言い方だ」とよく感嘆することがあった。

一方、日本人は中国語というと北京語（普通話）を思い浮かべる。そのため、漢字の音読みを北京語と比べて、あまり似ていないことを残念に思うことが多い。しかし、それは中国語の歴史とその多様性を日本人が知らないことに起因する早合点である。私の場合も日本人の場合も、「漢語」をめぐる日中の歴史をまったく知らない、忘れてしまっているのだ。

福建省に来る日本人の中に半分冗談で「人民解放軍」を閩南語でどう発音するのかと閩南人にたずねる者がいる。その閩南人が「jīn-bīnkái-hòng-gūn」と発音すると、それは、アクセントこそ違え、日本語の発音と、まったくと言っていいほど似ているのである。これは偶然であろうか。否。決してそんなことはない。それは、遣隋使、遣唐使、漢晋まで遡って歴史を振り返ったとき、歴史的に必然的なことだということが分かる。現在に至ってもなお両者の間で発音に類似性が残っているということ、また、発音だけでなく、語彙にも共通性が見られるということ、これを「忘れられたシルクロードの痕跡」ということも出来るだろう。そこで本稿では、歴史的経緯をたどりながら、閩南語と日本語の類似性を軸に両者の交流について論じたいと思う。

### 1. 閩南語の分布

中国は漢民族と55の少数民族からなっている。漢民族の中でも言語は大きく分類するとMandarin ChineseとSouthern Chineseに二分される（図1）。閩南語は後者に含まれ、閩南地方に分布している。その地域が今日では福建省として行政区画されているのだが、中でも沿岸の厦門、泉州、漳州を中心にした地域で使われている。また、この地域内でも微妙に変化が見られ統一した閩南語というものはない。

日本人にはなじみの薄い「閩」という文字は、門構に虫（古漢語では「虫」は虎の意）と書くが、これはそもそも、中原を離れて怪獣が出る無人の地の意味する。漢の時代に編纂された『周礼・夏官・職方氏』には「辯其報国、都、鄙、四夷、八蛮、七閩、九貉、五戎、六狄之人民」と記されているが、その中の「七閩」は現在の福建と江南部に分布する少数民族の集まっているところを指していた。

---

\*：中国厦門大学嘉庚学院日本語科



図 1

今日ではこの閩南語が使われる地域が、台湾、浙江省南部、広東省東部及び西部、海南省、また華僑の遷移でシンガポール、マレーシア、インドネシアなどの東南アジア各地にまで拡大している。なお、1977年宇宙に打ち上げられた2機のボイジャー探査機に搭載されたレコード-ボイジャーのゴールデンレコードに閩南語も収録されたことは、閩南出身の華僑がアメリカで活躍している証として閩南人の自慢となっている。

## 2. 閩南語の読書音・俗音と日本語の漢字音

### 2.1. 閩南語の形成

閩南語は、以下のような漢人との接触の歴史を経て形成されてきた。その歴史をたどりながら閩南語に刻印された上古漢語の影響の大きさを考えてみたい。

最初の接触は、中原にいた漢人が春秋時代に戦乱から逃れるために閩へ移動したことに始まると思われる。当時の漢人は、長江の以南の地域に住む民族をまとめて「百越」(図2)と呼び、「百越」民族は自分の言語を持つと、記録に残されていることから初期の言語接触があったことが考えられる。



図 2

その後、漢の時代、閩越王が周辺を侵略し始めたために、漢の武帝は閩越王を討伐に向かわせた。これが中原の漢人が初めて閩の土地に本格的に立ち入った事例だと考えられる。さらに、後漢末期には、各地に戦乱が勃発し、魏・呉・蜀の三国時代を迎えるのだが、呉の孫権が勢力を伸ばすため閩に侵入し、260年に「建安郡」を設置した。同時に、漢人が閩へ移入することによって、中原の農耕技術などと共に漢人が持ち込んだ「河洛官話」が閩南語の元になるなど、文化・言語に至るまで影響を閩はこうむった。

三国時代以後も、漢人の閩への流入は続き、晋から唐・五代十国にかけて大規模な「入閩」が三回発生した。

4世紀ごろに発生した八王の乱に乗じて、五胡と呼ばれる北方の騎馬民族が侵入し（五胡乱華）、その結果、西晋は滅びた。晋室が南渡することにより、華北は五胡十六国時代に入り南北の対立がはじまる。戦乱を逃れた多くの漢人が閩に移住し、「百越」と融合した。これが第一回の入閩である。この時、漢人が持ち込んだ上古の漢語の発音、語彙などが閩南語に刻印され現在に至ったと考えられる。

7世紀には、閩にある少数民族が反乱を起こしたのに対し、唐はそれを鎮めるために、漳州府を設立した。これが第二回の入閩であるが、やはり漢人が持ってきた漢語と文化は、閩南語に大きな影響を与え、「文白両読」と言われる現象が現れた。読書するときには漢人の「官話」を真似して「文言音」で発音するのに対して、普段は俗音（白話音）で発音するというものである。

第三回の入閩は唐後期・五代である。多くの中原漢人が閩南へ移住し、さらに豊富な中原文化と言語を持ち入れたとされる。

## 2.2. 閩南語と日本語の漢音・呉音との関係

隋唐時代、日本政府は遣隋使、遣唐使を派遣した。この時期、中国では李淵が618年に唐を建国、同じく長安に都した。彼ら中国華北（長安）地方の発音が漢音であり、遣隋使・遣唐使は、その漢音を学び日本にもたらした。

それ以前には、仏教と共に呉音が入り既に定着していた。たとえば、兄弟（きょうだい）、経文（きょうもん）、修行（しゅぎょう）、正体（しょうたい）、食堂（じきどう）、成就（じょうじゅ）、頭脳（ずのう）、世間（せけん）、莊嚴（そうごん）、灯明（とうみょう）、男女（なんによ）、人間（にんげん）、文書（もんじょ）など仏教関連の語彙を中心に今日にまで呉音は残っている。

ここに遣隋使・遣唐使が漢音を持ち帰るのだが、漢音が混入し混乱する事態は避けなければならない。41代持統天皇（645年－702年）は唐から音博士を招き、漢音の普及に努め、50代桓武天皇（737年－806年）は遣唐使らの進言を取り入れ、それまで使っていた呉音を改め、漢音を正式の音読みとする漢音奨励の勅命を792年に出した。僧侶にも漢音の使用が推奨されたのだが、上に見た仏教関連の語彙を中心に呉音は今日まで残存した。そのため、今日、僧侶の読経は、宗派によりあるいは各寺により口伝されるのだが、読みには呉音と漢音が入り交じる場合がある。

894年、遣唐使は廃され、公式の交流が途絶えたことにより、漢音が固定化され定着した。それ以後も交易や禅僧の留学、倭寇など民間の交流を通して文物と共に宋音、明音、清音なども入ってくるが、それはあくまで事物に付随する読みとしてであり（本章第三節を参照）、漢音の体系を崩すようなものではなかった。

漢音と呉音の存在は、ある意味で閩南語の「文白両読」と類似している。もともと一つの発音がある地域に、新たな発音が入ってきた。閩南語と日本語との発音は、大体同じ時期に、中国北方の発音の影響を受け、自分の民族の発音と融合して、新たな発音を生み出した。ここから閩南語と日本語とは接点があると思われるだろう。以下の発音を対照しよう。（表1）

表 1

詞例	呉音	漢音	閩南語	北京話
人	ニン	ジン	Lâng (俗音)・jîn/bí-lín (読書音)	ren
日	ニチ	ジツ	li't	ri
二	ニ	ジ	jī/lī	er
男	ナン	ダン	lâm	nan
一	イチ	イツ	it	yi
生	ショウ	セイ	senn (俗音)・sing (読書音)	sheng
車	シャ	シャ	Tshia (俗音)・ki/ku (読書音)	che
親	シン	シン	tshenn/tshinn (俗音)・Tshin (読書音)	qin
手	シュ・ス	シユウ	Tshíú (俗音)・síú (読書音)	shou
菜	サイ	サイ	tshài	cai
品	ホン	ヒン	phín	pin

そして、中沢 (2012) の研究でも、日本語の呉音、清音と閩南語の発音との対応関係を発見した<sup>1)</sup>。まず、漢音清音、呉音濁音の場合、日本漢字音のハ行・バ行は閩南語<sup>2)</sup>の「p-」「ph-」「h-」と対応、タ行・ダ行は「t-」「th-」「tsh-」と対応、カ行・ガ行は「k-」「kh-」「h-」と対応していることがわかった。(表2)

表 2

漢字	漢音	呉音	読書音	俗音	北京話
平	ヘイ	ビャウ	pîng	pēnn/pīnn	píng
浮	フ	ブ	hú	phú	fu
父	フ	ボ	hū	pē	fu
代	タイ	ダイ	tāi	tē	dai
傳	テン	デン	thuân	thńg	chuan
共	キョウ	グウ	kiōng	kāng	gong
具	ク	グ	kū	khū	ju

漢音非鼻音・呉音鼻音の場合は、漢音バ行、呉音マ行は閩南語の読書音、俗音ともに「m-」で対応する場合と「b-」で対応する場合があります、漢音ダ行、呉音ナ行は「l-」「n-」「j-」「t-」などで対応、漢音ザ行、呉音ナ行は「j-」「n-」「l-」「h-」「b-」様々な音で対応する場合がありますこともわかった。(表3)

表 3

漢字	漢音	呉音	読書音	俗音	北京話
冒	バウ	モウ	mōo	bōo	mao
問	フン	モン	būn	mńg	wen
奈	ダイ	ナイ	nāi	ta	nei
耳	ジ	ニ	ní	hīnn/hī	er
若	ジャク	ニャク	jió'k/lió'k	ná	ruo

### 2.3. 閩南語と唐音との関係

894年に遣唐使が廃止され、日本と中国との公式の交流は途絶えた。その後、室町幕府3代将軍の足利義満によって、日明貿易(勘合貿易)といわれる交易が開始される。この前後、禅宗の僧侶の留

学や倭寇の出現により「民間」の交流は見られた。

唐音は鎌倉時代以降に、禅宗の留学僧、貿易の商人あるいは倭寇によってもたらされた字音である。呉音、漢音と違い、体系的なものではなく、断片的で、輸入された文物を指す語として入ってきた音が多い。

たとえば、行脚（アンギャ）、行灯（アンドン）、椅子（イス）、脚榻（キャタツ）、脚絆（キャハン）、金子（キンス）、銀杏（ギンナン）、扇子（センス）、箆筒（タンス）、湯婆（タンポ）、提燈（チョウチン）、南京（ナンキン）、暖簾（ノレン）等。

宋元時代には、海上シルクロードが繁栄したのだが、その出発点は泉州、番禺（広州）、揚州、明州（寧波）などであった。その中で泉州と広州が一番大きな規模の港であった。特に泉州は唐の時代からある港で、宋元時代に東方最大規模の港となった。この時期、江蘇、浙江、福建など出身の商人が多かったため、これらの地域の人々が使った言葉が日本語に与えた影響も大きかったと思われる。以下の言葉は発音から閩南語の発音の影響が伺えるものとして挙げる。

たとえば、

表 4

詞例	日本語	閩南語	北京話
饅頭	マンジュウ	bán-thô	mantou
石灰	シクイ	tsio'h-hue	shi-hui
和尚	オショウ	huê-siünn	he-shang
玉	ギョク	gio'k (読書音)	Yu
金子	キンス	kimjí	jin-zi
椅子	イス	i-á (椅仔)	yi-zi

以上、閩南語と日本語は、歴史の流れに生まれた接点がわかった。そして、発音だけでなく、語彙面においてもお互いの接点が見られる。

### 3. 語彙面における閩南語と日本語との交流

#### 3.1. 古漢語の保存

閩南語と日本語との類似性は、発音の面に限らず、語彙の面からも伺われる。閩南語の中に、現在中国語にはすでに使わない古漢語が依然として使用されており、その古漢語が現在の日本語にも保存され使用されている。

たとえば、『孔雀東南飛』（東漢）には、「新婦（婦）初来时，小姑始扶床，今日被驅遣，小姑如我長」という文がある。現代中国語には、「新婦」という言葉は使われていないため、よく誤解されたが、閩南語では日本語と同じ、「お嫁さん」という意味で使われているため、「嫁した女」と容易に解釈できる。

また、『孟子・梁惠王上』（春秋時代）には、「王好勝，請以站喻：填然鼓之，兵刃既接，弃甲曳兵而走」という文の中に「走」という語が出てくるが、これも現代中国語では、この「走」という語は「歩く」という意味に変化して使われているため、現代中国人が読むと首をかしげることになる。しかし、古代中国語で「走」は、閩南語、日本語と同様「飛び出したり、素早く動き続ける」の意味で使われており、「駆ける」と解釈できる。閩南語では現在でも、「緊走」（早く走る）、「走閃」（速く走って逃げる）など日常用語としてよく使われている。

その他、お茶を飲むことを、現代中国語では「喝茶」というようになったが、古漢語では「飲茶」と言い、閩南語でも「飲茶」でお茶を飲むことを指す。学生時代に漢文が得意だった日本人が北京の

喫茶店に入って混乱する経験はよくあるが、彼が厦門の古い喫茶店に入ったとき安堵感とともに懐かしさを覚えるのには、故無きことではないのである。

### 3.2. 同素異順語の存在

もう一つの証拠は、同素異順語の存在だといえるだろう。

同素異順語というのは、中国の標準語に対していう名である。標準語に「AB」式の言葉は、閩南語に「BA」式で現れる。

たとえば、

表 5

閩南語	日本語	中国標準語
利便	利便・便利	便利
気力	気力	力気
康健	康健・健康	健康
面会	面会	会面
怪奇	怪奇・奇怪	奇怪

古漢語は単音節の語が中心であったが、時代が進むにつれて、単音節の語は同音語異議が多量に発生したため、交流に支障が生じ始めた。そこで、両音節言葉、多音節言葉が続々と出たのだが、新しく出た両音節言葉は最初の段階で不安定で、字順が逆転することもしばしばあった。

例えば、「利便」

『過秦論』：因利乘便、宰割天下、分裂河山。（漢・賈誼）

『荀子・非十二子』：辯説譬諭，齊給便利，而不順礼義，謂之奸説。

これらの字順逆転の言葉は上古から頻繁に出て、古漢語に残された。そして、遣隋使、遣唐使、また漢籍の転入によって日本語にも伝わり、日本語に残り続けている。

しかし、漢語のその後の変化の中で、どちらか一つに淘汰され、一字順が固定化された。しかし、古漢語の「活化石（生きた化石）」である閩南語には両方の言い方、あるいは最初の言い方が保存されてきた。

### 3.3. 日本語の中に存在している閩南語借用語

ここでは視点をかえて、日本語の中に、閩南語から伝わって来た言葉の存在を交流の証として紹介しておこう。日本語の中に定着した閩南語として、たとえば、「ビーフン／米粉 (bí-hún)」、  
「レンブ／蓮霧 (オオフトモモ) lián-bū」、  
「サバヒー (さばひい)／虱目魚 (和名) (sat-ba'k-hí/sat-ba'k-hû)」、  
「レンヒイ／鮭魚 (lián-hû)」、  
「ケチャップ／鮭汁 (koe-tsiap)」、  
「サンパン (三板)／舢板 (sam-ban)」、  
「紅毛人 (こうもうじん)／紅毛人 (âng-mn̄g-jîn)」などの言葉がある。

「ケチャップ」は ketchup である。Ketchup この言葉はオランダ語の kitjap とインドネシア語の kechap から伝わってきた言葉で、もともとこの二つの言葉は閩南語の ke-chiap から来たものとする説がある。ke-chiap というのは鮭をはじめとする海産物で作られた塩辛いソースのことであったが、欧米に伝わり、手に入れやすいトマトを海鮮のかわりに使うようになり、いまのトマトソースに変じられたのである。

また、「紅毛人」という言葉は江戸時代にオランダ人、広くいうと、欧米人を指す異称である。髪やひげが赤いのを見て、中国人が名付けた。現在はあまり使われていないが、かつては日本でも使われたことから、交流の歴史的な証ということができよう。

そのほか、「台風」という言葉の起源については、いろいろな説があるが、その一つに閩南語から来たという説がある。閩南語には「台風」を「風颱 (Hong-thai) / 風篩 (Hong-shai)」という。「風颱」というのは台湾のほうから来た強い風という意味で付けられた名である。清の王士禛『香祖筆記』には、「台湾風信与他海殊异，风大而烈者为颶，又甚者为台。颶倏发倏止，台常连日夜不止。正、二、三、四月发者为颶，五、六、七、八月发者为台」という文があり、台湾から来た風はほかの海域と違い、大きいものは「颶」といい、さらに強烈なものは「台」と言ったと記録されている。また、魯鼎梅氏は『台湾県誌』に「所云台者，乃土人见颶风挟雨四面环至，空中旋舞如筛」とあり、「台」という意味は強い風が雨とともに空から吹き出し、空中を舞い、篩のようだというのである。

日本では、かつて台風を「のわき」と呼んでいたが、明治時代末に、当時の中央気象台長「岡田武松」が「颶風 (たいふう)」を使い始め、当用漢字が定められた1946年以降は、「台」の字が代用され「台風」となった。ここから「台風」という言葉は閩南語と繋がりがあったと言えないだろうか。

#### 4. 日本語が閩南語への流れ込み

19世紀以後、中国は衰える状態から維新を図るため、日本に倣い道にいった。当時の日本では、西洋の新語を訳すとき、少数の音訳を除いて大部分は意識した。しかも漢字もよく使う。特に、意識の場合は、中国語の造語法のルールを守って作られたものが多い。また、中国語の語形を直接利用して西洋の新語を訳したものも少なくない。それで、日本の訳語は中国人に喜ばせ、日本の訳語を大量に取り入れる時代となった。

例えば、「science」という言葉は、陳独秀に「賽先生 / 賽因斯」と音訳されたが、意味が推測しにくいので、日本語の訳語「科学」に取り換えられたのだ。

一方、台湾は1895年の日清戦争の結果、51年間日本の統治下にあった。日本政府は日本語「同化政策」を強力に推進し、一連の政策下で、台湾での日本語の普及率は急速に上った。台湾の普通語にも、閩南語にも日本語の語彙が大量に流入した。これらの新語としての日本語は台湾の閩南語の日常用語として深く根を下ろし、「日本語」を抜きに人々が生活することはもはや不可能である。その一方で台湾に生き残った閩南語は張(1983)の研究によると、222語があるという。

台湾に比して、中国大陸の閩南語は一つの方言として大きな変化は見られず、台湾ほど日本語の影響を受けていない。それでも、台湾閩南語の影響で、徐々に流入している。たとえば、「便所」、「去出張」、「月給」、「放送頭」、「合万」、「化粧間」などの日常用語があげられる。

日本語が閩南語に取り入れられたとき、中国語の構造法に合わせて多少の変更が加えられた。たとえば、「去出張」という言葉は、日本語の「出張」を取り入れたときに次のように変更された。「出張」は日本語で名詞であり、後ろに「する」をつければ動詞としても使える。しかし、閩南語にも標準語にもこのような文法はないため、「出張」の前に「去」という動詞をつけ、中国語に適する言葉に変更したのである。

また、「放送頭」という言葉は、日本語の「放送」を取り入れた後に、台湾閩南語では「頭」という言葉をつけて、「マイク」という意味にしたのである。「頭」という言葉は、閩南語では、「あたま」という意味のほか、「最初の部分」、「トップ」などの意味を持っている。そこで、「放送」の後ろに「頭」をつけ、放送によく使われるマイクを指すようになったのである。

そして、台湾の閩南語は中国大陸の閩南語より受容性が高い。例えば、「阿达玛康固力」という言葉は、「頭がコンクリ」から来たものである。日本語には「頭がコンクリ」という言い方はないが、「コンクリ」で頭が固いという意味に転じて台湾の人がそういう言い方を作ったのである。

1980年代以降は、中日の交流によって、中国語、台湾語にもたくさんの日本語新語がどんどん入ってきて、流行語として若者同士の間で注目を浴び、愛用されている。

## 終わりに

以上、閩南語と日本語との接触を、歴史を遡って検討してきた。閩南は漢の時代から中原（中国北方）の人口移転を受け、7世紀には北方の古漢語が大規模に流入したことで「文白両読」が成立し閩南語の中に古漢語が深く刻印された。ここで閩南語の時計の針がとまっている。一方、日本では、仏教伝来とともに呉音、遣隋使・遣唐使によって漢音がもたらされたが、792年の漢音奨励の勅命、および894年の遣唐使廃止によって、7世紀から9世紀にかけての漢音が固定化され、一部の例外を除き音読みの時計の針がとまった。

閩南は周縁部であるがゆえに、日本は国家規模の交流が絶えたために、ほぼ同時期の古漢語が固定化され、漢語の大きな変遷の影響を受けることなく、保存され今日に至っている。冒頭に紹介した「人民解放軍」の発音は、遣隋使・遣唐使が耳にした音とほぼ同じものであろう。そしてそれは、当時の漢音が閩南語に保存されていることと、日本において漢音が固定化されたということが同時に生じて初めて成り立つことなのである。誰が意図したわけでもない、閩南語と日本語の音読みの類似性は上に見てきたような歴史的経緯によるものであるが、その結果は他に類を見ない歴史の奇跡と言っても過言ではないだろう。これを私は、「忘れられたシルクロードの痕跡」として捉え、今後はさらに厳密な言語学的、歴史学的な検証を加えて行きたいと思う。

[キーワード] 閩南方言 日本語 漢字音 借用語

## 注

- 1) 中沢（2012）「日本語の漢音・呉音と台湾語の読書音・俗音」に詳しい。
- 2) 原作は台湾語と書いてある。台湾語は福建省の泉州音と漳州音がもとになっている。

## 参考文献

- 中沢信幸（2012）「日本語の漢音・呉音と台湾語の読書音・俗音」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第9号
- 嚴棉（1994）「從閩南話到日本漢字音」『中国語文』
- 劉明・鶯尾紀吉（2010）「中国語の日本語への影響」『中央学院大学人間・自然論叢』
- 馬重奇・李春暎・張凡（2013）『閩台方言の源流と嬗変』人民出版社
- 周長楫（2014）『閩南方言と文化』中国国際広播出版社
- 李如龍・姚榮松（2007）『閩南方言』福建人民出版社
- 陳恒漢（2011）「閩南方言“流浪記”：以詞匯輸出以証」『長春理工大学学報・社会科学版』24卷6期
- 黄迎春・新居田純野・上原総（2006）「台湾閩南語に残っている日本語語彙」『言語処理学会論文集』
- 葛劍雄（2014）『西漢人口地理』商務出版社
- 張良澤（1983）「台湾に生き残った日本語」『中国語研究』22 pp.1-36
- 小川環樹・西田太郎・赤塚忠（1968）『角川新字源』角川書店

# A forgotten imprint of Silk Road: the connection between Ninnan Dialect and Japanese

SHANG, Zhonglan

This article has studied the historical development of both Ninnan Dialect and Japanese. Based on the analysis in their pronunciation and vocabulary, similarities between Ninnan Dialect and Japanese have been found. They both have some similar pronunciation, which proved to belong to the features of ancient Chinese. Moreover, they have borrowed the spelling from each other on the lexical level.